

シリーズ1、病虫害等による庭木の被害とその対策 (2)

一庭木の松類を守る：マツカレハの被害一

富山県林業技術センター林業試験場

中山間地域資源課長 西村 正史

前回はマツ材線虫病を紹介しましたが、今回はマツカレハという害虫を紹介します。

この虫の幼虫は松毛虫（まつけむし）と呼ばれ（図-1）、アカマツ・クロマツ・リュウキュウマツ・ゴヨウマツなどの松類、ヒマラヤスギ・カラマツ・モミ・トウヒなどの針葉樹の針葉を加害します。古くから松林に大発生する典型的な森林害虫でありましたが、最近では都市公園・街路樹・庭園樹での被害が顕著になっております。本県でも海岸のクロ松砂防林、川沿いの松並木でも毎年のように多発しています。

生態と防除

富山県では卵から成虫になるまで、1年を要します。成虫は8月に現れ、卵を松類の針葉に塊として産みつけます。塊の大きさは数粒から700粒で、平均300粒前後です。1週間で孵化した幼虫は集団で、当年に伸びた針葉の葉の片側だけを食べ、他は残します。このため、針葉が「枝枯れ状態」のようになり、容易に被害の発生を知ることができます。この時期にこのような状態になった枝を高枝バサミで切断し、足で踏みつぶしたり、焼いたりしましょう。被害発生の元を簡単に取り除くことができますので、防除という観点からは非常に有効な方法です。是非、実行してください。

幼虫はその後散らばり、針葉全体を食べるようになります。11月に入ると幼虫は針葉から幹あるいは林床に移動し、樹皮の裂け目や落葉の下に潜って越冬します。この習性を利用して、10月頃に胸のあたりの幹にコモあるいは新聞紙を巻きつけましょう。そうすると、幼虫は越冬場所と勘違いして、そこに集まります。コモあるいは新聞紙を12月から翌年の3月の間の都合のよい時に取り外し、集まっている幼虫を足で踏みつぶしたり、焼いたりしましょう。この方法も簡単で効果がありますので、是非実行してください。

越冬後は、3～4月に樹上に登り、再度針葉を食べます。そして、6月の下旬から7月にかけて樹上に黄褐色の繭をつくり、その中で蛹から成虫

に変化し、外へ出ます。幼虫の食害量の大部分は5月下旬から6月にかけてです。6月に入ると被害が目立つようになりますので、5月中旬頃に松類の根元の周囲の地面をよく観察してください。もしも褐色の丸い小さな塊（虫のウンコです）がたくさんあれば、マツカレハがいる証拠です。スミチオン乳剤（1000倍液）を散布しましょう。

なお、マツカレハの幼虫が針葉を90%以上食べると成長は著しく低下し、このような状態が2年程度続くと枯死する確立が高まりますので、注意してください。



図-1 マツカレハの幼虫



図-2 ふ化幼虫による食害の状況